

# 大阪北河内地区における 生物学的製剤導入パスを用いた 関節リウマチの地域医療連携



関西医科大学附属枚方病院 リウマチ・膠原病科 科長・病院准教授 **尾崎 吉郎** —写真左—  
 同 リウマチ・膠原病科 兼 整形外科 講師 **和田 孝彦** —写真中左—  
 同 リウマチ・膠原病科 助教 **孫 瑛洙** —写真中央—  
 同 リウマチ・膠原病科 看護師 **篠田 智美** —写真中右—  
 みやしまりウマチ整形外科クリニック 院長 **宮島 茂夫** —写真右—

関節リウマチ (RA) の治療において生物学的製剤の早期からの導入は、患者の関節破壊の進行を止め、限りなく治癒に近い効果を期待できる治療として急速に普及した。この治療は外来診療が基本となるが、生物学的製剤の使用については得られる効果が大きい反面、重篤な副作用発現リスクが懸念されることから、導入に際しては各種検査を踏まえた上で慎重な判断が必須である。また、副作用発現時等に緊急対応できるバックアップ病院の存在が不可欠となる。

今回は関西医科大学附属枚方病院を訪ね、大阪府北東部の北河内地区（枚方市、交野市、寝屋川市、守口市、門真市、四條畷市、大東市）を中心とした地域のリウマチ医療連携の試み取材した。北河内地区のRA診療のバックアップ病院としての役割を果たすべく、リウマチ・膠原病科の尾崎吉郎科長らは、2年前から生物学的製剤導入に特化した地域連携パスを作成し、リスクの高い生物学的製剤治療を安全に普及させる努力を続けている。リウマチ・膠原病科の活動について、同科のスタッフにお話をうかがうとともに、連携先の医療施設である、みやしまりウマチ整形外科クリニックの宮島茂夫院長にもコメントをいただいた。